

# ダンテの「主の祈」について

竹 内 信

ダンテ (Dante Alighieri, 1265—1321) はその神曲 (Divina Commedia) の煉獄篇第11歌 (Purgatorio, Canto 11) の冒頭に「主の祈」を用いている。一体いかなる意図を以って、ダンテは「主の祈」をこの箇所を使用したのだろうか。また、ダンテの「主の祈」は聖書に記され、教会の典礼において用いられている「主の祈」にもとづくものであるが、ダンテによる独自のパラフレーズがなされていて、8連24行に及ぶものとなり、本文の「主の祈」の3倍の長さのものとなっている。ダンテのパラフレーズの意図はどこにあったのだろうか。こうした問題を理解したいと願って検討して見た考察の1端を記して見たい。

煉獄篇第11歌で、ダンテはローマの大詩人ヴィルジリオ (英語では Virgil, ラテン名では Publius Vergilius Maro) に導かれて、煉獄界の第1の環道にある。ここでは生前、傲慢の罪を犯したものが、その罪を潔めるため、重い大きな石を背負って、その重さのため地につくほど身をかがめて、泣きながら行進している。「主の祈」はこの浄罪者たちが歩きつつなえているのである。

## 「主の祈」について

「主の祈」 (The Lord's Prayer, あるいはラテン語の冒頭の句をとって Pater Noster) はあらためて言うまでもなく、イエスが弟子たちにこのように祈れと言って、祈の型として教えたと言われる祈である。新約聖書中、マタ

イ福音書第6節9節から13節までと、ルカ福音書第11章2節から4節までとの2ヶ所にある記事にもとづくものである。マタイ、ルカの両福音書において示されている「主の祈」はほとんど共通した形式と内容のものであるが、細部においては相違が見出される。ルカにおいて、神への呼びかけは「父よ」と短い。マタイにおいては「天にいますわれらの父よ」と長くなっている。また「御国が来ますように」のあとに、マタイは「みこころが天に行なわれるとおりに、地にも行なわれますように」の祈があるが、ルカにはこの部分はない。終りの部分もマタイのが、「わたしたちを試みにあわせないで、悪しき者からお救い下さい」となっているのに対して、ルカのは「わたしたちを試みに会わせないでください」と短くなっている。

イエスが「主の祈」を教えられたのは少数の弟子たちに対してであって、弟子たちの個人的な、デボーショナルな使用のためにこの短い所を与えられたことは、マタイ及びルカの「主の祈」の記事を注意して読めば分ることである。マタイにおいては「主の祈」は山上の説教の中で教えられているが、山上の説教は群衆を避けて山に登られて、そこで弟子たちを近く呼び寄せて教えられた。(マタイ5:1)。そして、「主の祈」を教えられる直前に、祈るとき「自分のへやにはいり、戸を閉じて、かくれた所においでになるあなたの父に祈りなさい」と教えていられることを思う時に、「主の祈」は個人的なデボーショナルな祈としてイエスはお示しになったと思わざるを得ない。ルカの場合も、「主の祈」を教えられたのは「イエスがある所で祈っておられた」時であって、決して公衆の面前ではなかった。

しかし、まもなく「主の祈」は公同的 (corporate) な礼拝において、典礼的 (liturgical) な祈として用いられるようになった。新約聖書中には、「主の祈」を公同の礼拝において用いたとの言及がないので、いつごろから「主の祈」の礼拝的使用が始まったかはきめることは出来ない。ただ、マタイ福音書において示された「主の祈」の末尾に、いわゆる頌栄 doxology なる礼拝的な部分が附加されていることは、教会の歴史の極めて早い時期に、「主の祈」が礼拝において用いられるようになったことを示すものと見られないこともな

## ダンテの「主の祈」について

い。

この頌栄は「国とちからと栄とは限りなく汝のものなればなり」という形のもので、欽定訳英訳聖書 *Authorized Version* にはテキスト中に組み込まれ、広く普及し、日本においても文語訳聖書では存在していたものである。その後、聖書研究の発達とともに、この頌栄文は権威ある聖書校本に見えられないとして、削除される傾向が強くなっているが、多くの写本に附加されているという事実は「主の祈」が早くから教会において、典礼的（リタージカル）な使用が普及していたことを示すものではなかろうか。ディダケー *Didache*（十二使徒の教訓）はシリア地方の教会で用いられた受洗者訓練のための文書であるが、その出現の時期については、従来第1世紀の終りごろとか、第2世紀の初頭ごろとか言われていたが、近年の研究によると50—70 A. D. のころにまでさかのぼれると言われる。<sup>1)</sup> Jeremias の指摘によると「主の祈」はすでにこの時期に、受洗者の訓練のために用いられ、バプテスマを受けたものがはじめて「主の祈」を用いることを許されたということである。

その後、「主の祈」は教会において引き続き使用された。はじめ、「主の祈」は限られたサークルである弟子たちを対象として、イエスから与えられたものであり、また初期においてはバプテスマを受けたもののみが用いることを許された祈であったが、次第にその使用は一般化して行った。中世紀においては、ラテン語の聖書の読めない人々にキリスト教信仰を教える小型の教科書の役割を果たしていた感がある。

このようにして「主の祈」は教会の礼拝においても、信徒の信仰生活においても重要な働きをして来たわけであるが、あまりにもしばしば用いられるためにその使用が形式に流れる傾向があったことも見のがしてはならない。宗教改革者マルチン・ルターは「主の祈」は「最大の殉教者」になったと言ったというが、内容が深く考えられないでただ形式的に口ききだけで称えられることの多いことを嘆いて言ったのであろう。「異邦人のようにくどくどと祈るな。

1) Joachim Jeremias, *The Lord's Prayer in Modern Research*, in *The Expository Times*, Vol. LXXI, No.5, Feb. 1960.

彼らは言葉かざが多ければ聞き入れられると思っている。だから、彼らの真似をするな」<sup>2)</sup>と教えるために模範として示された祈が、口先きだけで繰返されることが多くなっているということは何という皮肉であろうか。

## 煉獄の「主の祈」

ダンテ自身、「主の祈」のもつ深い意味を理解して、神曲において適切な敷衍を行なって適切な場所で用いている。しかし、これを読む場合、読者はダンテの「主の祈」使用の真意を理解して正しく読み取っているであろうか。おびただしい神曲を読む人の理解のしかたを知る道はなく、軽率にとやかく論議することは出来ないが、眼にふれる神曲の註疏などによって、人々の「主の祈」の理解はきわめて表面的にとどまり、内容の深い理解にまで及んでいないのではないかとの感が抱かせられるのである。

ダンテは煉獄の7環道にそれぞれに適した祈を配している。傲慢の罪を潔める第1環道には「主の祈」*Pater Noster*、嫉妬の罪を潔める第2環道には「聖徒連祷」*Litany of the Saints*、忿怒の罪を潔める第3環道には「神の羔」*Agnus Dei*。怠惰の罪を潔める第4環道には労働即祈との考えから特別な祈は配されていない。貪慾の罪を潔める第5環道には「わが魂は塵につきぬ」*Adhaesit pavimento*、暴食の罪を潔める第6環道には「主よ、わが唇を開き給え」*Labia mea, Domine*、色慾の罪を潔める第7環道には「いと高き慈悲の神は」*Summae Deus clementiae* という風に各環道に一つずつの祈が配置されているのである。

ダンテは各環道の性格と状況にもっともふさわしい祈を配置するよう心を用いていると思うが、一般の読者、また研究者すらもただ形式的にのみ考えるだけで、状況と祈禱との関係を明らかにし、それぞれの祈のもつ深い意味にまで思いを深めようとはしない場合が多いように思われる。

煉獄の環道に配置された祈のリストを見て気付く1つのことは、そこに出て

2) マタイ福音書第6章7、8。

### ダンテの「主の祈」について

いる6つの祈はそのうち5つまでラテン語の祈であるのに、ひとり「主の祈」だけがイタリア語であるということである。他の祈がラテン語であるということは、当時教会における礼拝において用いられていたラテン語の祈をそのまま挙げていうことであって、いずれもタイトルとして用いられた初めの句のみを挙げていうにすぎない。それに対して「主の祈」はその全体をイタリア語で掲げ、それに本文に倍するほどの量のパラフレーズを付け加えている。こうしたダンテの取り扱いからして、たとえ他の5つのラテン語の祈が単に形式的に用いられているにしても、ひとり「主の祈」のみはかなり深くその意味を重んじた、内容的な取り扱いがなされていると見ていいであろう。

### 「主の祈」のイタリア語訳

ダンテの「主の祈」のパラフレーズの内容について考える前に、「主の祈」のイタリア語翻訳について簡単に触れておきたい。

神曲に引用されている聖書のテキストに就いてもっとも綿密に研究しているのは、Edward Moore である<sup>3)</sup>。Moore は Dante の全著作を検討して、そこに引用されている聖書のテキストの表を作製しているが、そこに表示されている神曲における聖書の引用は合計 309 である。そしてその引用はすべてラテン語訳聖書 *The Vulgate* からである。カトリック教会における公認の聖書が *The Vulgate* であった訳であるから、ダンテがこのラテン語聖書を使用し、すべての引用をこれに依ったことは当然のことと言わねばならぬ。しかるに、ひとりこの「主の祈」のパラフレーズのみが、イタリア語の「主の祈」を用いているということは如何なる事情によるのであろうか。

聖書のイタリア語翻訳については、まだ十分の検討を加えていないので、精細に述べることはできないが、Geddes MacGregor によると<sup>4)</sup>、イタリア

3) Edward Moore, *Studies in Dante, First Series, Scripture and Classical Authors in Dante*, Clarendon Press, 1896: reprinted, 1969.

4) Geddes MacGregor, *A Literary History of the Bible*, Abingdon Press, 1968, pp. 102-103.

語の新約聖書は1471年に刊行されたが、旧新約聖書が完成したのは1532年であったということである。Miles Coverdale による英語聖書の出現は1535年であるから、ほとんど同時期にイタリア語聖書も世に出た訳である。しかし、こうした近代語訳の聖書は伝統を重んずるロマ・カトリック教会の受け入れるところとならず、聖書も翻訳者もきびしい弾圧を受けたことは、英語聖書の歴史において明らかにされていることであるが、カトリック教会の勢力が強大であったイタリアにおいては、英国よりもさらに大きな困難があったであろうことが察せられる。宗教改革的意図のもとになされたイタリア語聖書はローマ教皇によって使用を禁止せられ、その禁令は1757年まで解除されなかった。こうしたイタリア語聖書の歴史を思うとき、ダンテの生存した14世紀にラテン語訳聖書ウルガタ以外のイタリア語聖書が存在したとは思われない。

そうした事情を思うときに、ダンテが煉獄篇で用いているイタリア語の「主の祈」は一体何人の手によって翻訳されたものであろうかとの疑問を持たされるのである。

「主の祈」の使用の一般化にともない、聖書の翻訳とは別に、「主の祈」が教会の所在する国の国語に翻訳されることはかなり古い時代からなされたようである。イタリアにおける事情はまだつまびらかにすることができないが、たとえば、英国においてはすでに10世紀ごろ、古英語に訳された「主の祈」が存在していたということである<sup>5)</sup>。倉長真教授の研究によれば、中世紀の英国カトリック教徒が用いた「信徒用ミサ書」*The Lay Folks Mass Book* には中世英語の「主の祈」を記載しているが、このミサ書の編者シモンズは「原文はフランス語であり、最初の英訳はおそらく1300年ごろの北方方言でなされた」といっているそうであるが<sup>6)</sup>、もしそんなフランス語の「主の祈」があったとすれば、ダンテの知るところとなっていたと考えることも可能である。

ダンテの伝記のうち、もっとも古いものと言われるボッカチオのダンテ伝

5) 倉長真, 「イギリスの文学とキリスト教」研究社. pp. 23-27.

6) Ibid, p. 29.

### ダンテの「主の祈」について

7)によると、ダンテはその追放の生涯の間にパリに赴き、神学や哲学を研究したことがあったと記されている<sup>8)</sup>。この伝記にはさらに数カ所にダンテのパリ滞在のことが述べられているが、それらを総合すると、ダンテは単に留学しただけではなく大学のようなところで講義を行なったようにも思われるのである。このボッカチオのパリ滞在説には近代のダンテ学者の中には、その真実性を疑う人もあり、問題となるが、ダンテがフランス語——当時のプロヴンス語をよく知っていたことは、煉獄第26歌においてプロヴンスの吟遊詩人アルノー Aronaut Daniel を描いた時に、アルノーをしてプロヴンス語で3連9行にわたって自己を紹介させていることでも分ることである。こうしたダンテのフランス語の知識を思う時、ダンテがフランス語訳の「主の祈」に接したとき、これにヒントを得てみずから「主の祈」をイタリア語に翻訳することを思い立ったこともあり得ることと思えるのである。

しかし、これはいづれも推測にすぎぬことであって、断言はできない。さらに進んだ研究を必要とすることである。しかし、もしダンテが「主の祈」をイタリア語に訳したとすれば、聖書の近代語訳の先鞭をつけたこととなり、聖書翻訳の研究者の関心をひく問題を提供することになる訳である。問題は推測の域を出来ないことかも知れないが、イタリア語訳の「主の祈」が1308年から1313年までに書かれたというダンテの神曲の中に存在しているということは無視することの出来ない事実であって、これを基礎として研究を深めて行かねばならぬ問題であると思う。

神曲に見られるダンテの「主の祈」のパラフレーズの原文は次のようなものである。

O padre nostro, che ne' cieli stai,  
Non circumscriitto, ma per più amore

7) Giovanni Boccaccio, *Vita di Dante*, first printed at Venice, 1477, English translation by James Robinson Smith, 1901. New York.

8) Ibid, p. 17

Ch' ai primi effetti di là su tu hai,  
Laudato sia 'l tuo nome e 'l tuo valore  
Da ogni creatura, com' è degno,  
Di render grazie al tuo dolce vapore.  
Vegna ver noi la pace del tuo regno,  
Chè noi ad essa non potem da noi,  
S' ella non vien, con tutto nostro ingegno.  
Come del suo voler li angeli tuoi  
Fan sacrificio a te, cantando Osanna,  
Così facciano li uomini de' suoi.  
Dà oggi a noi la cotidiana manna,  
Sanza la qual per questo aspro deserto  
A retro va chi più di gir s'affanna.  
E come noi lo mal ch' avem sofferto  
Perdoniamo a ciascuno, e tu perdona  
Benigno, e non guardar lo nostro merto.  
Nostra virtù, che di leggier s' adona,  
Non spermentar con l' antico avversaro,  
Ma libera da lui, che s' la sprona.  
Quest' ultima preghiera, signor caro,  
Già non si fa per noi, chè non bisogna,  
Ma per color che dietro a noi restaro.<sup>9)</sup>

参考のために現行のイタリア語訳聖書<sup>10)</sup>にあるマタイによる福音書の「主の

9) *La Divina Commedia*, ed. by C. H. Grandgent, 1933, Heath 刊のテキストによる。

10) *La Sacra Bibbia, versione riveduta sui testi originali*, Società Biblica Britannica e Forestiera, Roma, 1967, p.765.



ダンテの「主の祈」について

祈」のテキストを示しておこう。600年以上の時代の相違があって、イタリア語の語法の変化があるので、簡単な比較は出来ない点もあろうが、共通した用語、表現もかなりあって、比較、対照して見れば、ダンテのテキストにおいて、どの部分が「主の祈」の本文であり、どの部分がダンテの手になるパラフレーズであるかが弁別されよう。

Padre nostro che sei ne' cieli, sia sanctificato il tuo nome.

Il tuo regno venga.

La tua volontà sia fatta in terra come in cielo.

Dacci oggi il nostro pane cotidiano.

E rimettici i nostri debiti, come noi ancora li rimettiamo a' nostri debitori.

E non indurci in tentazione, ma liberaci dal maligno; perciocchè tuo è il regno, e la potenza, e la gloria, in sempiterno. Amen.

ダンテの「主の祈」の英語訳については、格調の高いテルツァ・リマ韻文訳から、平明を旨とした散文訳まで種々あるが<sup>11)</sup>、ここでは意味をよく示していると思われる John D. Sinclair の散文訳掲げる。

Our Father which art in heaven, not circumscribed but by the greater love Thou hast for Thy first works on high.

Praised be Thy name and power by every creature as it is meet to give thanks for Thy sweet effluence;

May the peace of Thy kingdom come to us, for we cannot reach it of ourselves, if it come not, with all our striving;

11) 神曲の英訳については大阪女学院短期大学紀要第2号、1969、所載拙稿「ダンテ神曲の英訳について」を参照されたい。

As Thine angels make sacrifice to Thee of their will, singing  
hosannas, so let men make of theirs;

Give us this day the daily manna, without which he goes backward  
through this harsh wilderness who most labours to advance;

And as we forgive everyone the wrong we have suffered, do Thou  
also forgive in loving-kindness, and look not our deserving;

Our strength that yields so lightly put not proof with the old adver-  
sary, but deliver us from him who so goads it.

This last petition, dear Lord, we make not now for ourselves, for  
there is no need, but for them that remain behind us. <sup>12)</sup>

### 日本語訳の問題点

この部分の日本語訳<sup>13)</sup>は概して言えば、消化が十分になされておらず、非常に難解なものが多い。それというのも、やはり、ダンテの「主の祈」に対して、その使用の意図への考慮があまり深くなされておらず、前に述べた形式的な、ただりターゲットカルな受け取りかたがなされているからではなかろうかと思われる。日本訳の多くのものに見られる欠点の一つは、「主の祈」そのものに対する十分の理解を欠いていることである。

たとえば、ある日本語訳<sup>14)</sup>には「今日われらの 日常の糧（マンナ）をわれらに与え給え」となっているが、この「日常の」に当る語、*cotidiano* は *ἐπιούσιος* の訳語であって、厳密には *for the coming day* に当り、「明日の」ということになるが、一般には *daily* 「日毎の」と訳されている語である。旧約の出エジプトの物語において、神から与えられる食物マナは次の日1日分だけを集めることが許され、怠らばそれ以上集めても腐って食べられな

12) *The Divine Comedy*, tr. by John D. Sinclair, *II Purgatorio*, The Bodley Head, 1958, p.143

13) 神曲の日本語訳については註11) に示した拙稿を参照されたい。

14) 野上素一訳「ダンテ」世界古典文学全集35, p. 149

### ダンテの「主の祈」について

くなったといわれているが、こうした物語が背景になっている語で、「その日その日の」の意味を有している。決して「日常の」ordinary という意味はないのである。またある日本語訳<sup>15)</sup>には、

「われらが受けし害悪（そこない）を何人にも許し給うがごとく  
おん身はわれらが功德（くどく）を見そなわすことなく  
御恵（みめぐみ）によりて、われらを赦したまわんことを」

と訳されているが、「われらが受けし 害悪を何人にも 赦し給うがごとく」では、神が赦し給うことになるが、それは間違いで、「主の祈」では「われらが受けし害悪をわれらが赦すごとく」なのである。マタイ福音書の「主の祈」の記録ではこの点が特に重要であるとして、

「もしもあなたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう」<sup>16)</sup>

と附記されているのであって、訳者が一度聖書を読んでいたならば、こうした間違いはしなかったであろう。

山川丙三郎訳は理解においてほぼ正確であるが、文体が古く一般大衆のために難解であったラテン語を避けて、俗語であったイタリア語を用いたダンテの意図から、かなりかけ離れていると言わねばならない。平明を意図して口語訳を行なった平川裕弘氏が、この部分だけは口語訳を行わず、山川氏の文語訳をそのまま採用されているのは納得の出来にくい処置である。平川氏は、「山川訳「神曲」の文体は文語体の邦訳聖書の文体に強く影響されているので、この「主の祈」の訳文にはふさわしく思われる」<sup>17)</sup>とその意図を説明しておられるが、これもまったく「主の祈」を形式的なりターゲットな使用の面からだけ

15) 三浦逸雄訳「神曲第2部煉獄」角川文庫 2630 p. 111

16) マタイによる福音書第6章 14,15節

17) 平川祐弘訳「ダンテ神曲」世界文学全集Ⅲ-3 河出書房 p. 226

考えておられるから、こうした判断をされたのであろう。

次に掲げる私訳は、傲慢罪浄罪のために「主の祈」を用いたダンテの意図をさぐるために、儀式的使用に重さを置かず、原文の意味をできるだけ明らかに表わそうとした散文訳である。

天に局限されてい給うからでなく  
諸天と天使たちという最初の被造物を  
より深く愛し給うが故に、天にいます父よ

すべての被造物によってみ名とみ力が  
讃美されますように。恵みある息吹きなる  
御知恵に感謝するのは当然のことです。

神の国の平和をきたらせて下さい。  
力を努してもみ国が自ら来るのでなかったなら  
自分の力では到達できないのです。

天使らが天上でホザナの歌を歌いつつ  
その意志をみ前に捧げて礼拝するように  
地の人にもおのが意志を捧げさせて下さい。

今日も日毎の糧マナをお与え下さい  
これがなければこの荒寥たる曠野を力を尽して進むとも、  
ただ後方に退くことになるにすぎません。

悪をなすものすべてをわたしたちが赦すように  
恩寵を以ってわたしたちの悪を赦して下さい  
わたしたちの功績を見ることなく。

## ダンテの「主の祈」について

たやすく打ち負かされるわれらの意志力を  
人類の昔ながらの悪魔の試みには会わせず  
責め悩ますものから助け出して下さい。

愛する主よ、この最後の嘆願は  
われら自身には不必要ですが、  
地上に残されているものたちのために捧げるのです。

### ダンテのパラフレーズ

ダンテは「主の祈」のパラフレーズの第1連において、神の天への局限について独創的な見解を示している。「天にまします」と言うが、これは神を天に局限する意味ではなく、最初の被造物である諸天、およびそこに配置されている天使たちへの愛の故に天にいまし給うのであるというのである。神が天にいまし給うのは必然的な局限ではなく、神の愛にもとづく自由な選択であるというので、同時に、最後の被造物である人間への愛の故に、みずから進んで地上への自己制限もあり得ることを暗示している。この地上への自己制限はすなわちイエス・キリストにおける神の顕現 *incarnation* だと言えよう。一見難解に見えるダンテの局限論の中にも、神の愛についての深い理解が読み込まれていることを認めねばならない。

第3連の神の国の来臨のための祈にも、ダンテの深い信仰理解の一端が示されている。神の国を来らせ給えという祈を敷衍して、神が与えることによって、み国を来らせ給わないかぎり、人間の努力のみではどうしても神の国は来らないということが強調されていて、ダンテは神の国の恩寵的性格を正しく理解しておったことがわかる。

神の国を地上の国家のように領域的に考える人々には、み国の平和を来らせ給えと、平和という語を加えて、抽象化したことは不満を感じさせるかも知れ

ない。しかし「神の国」の本来の意味は「神の支配」<sup>18)</sup>であって、地域的な領域をさすものではなかった。神の意志が行なわれ、すべての民が神に従がうところが神の国である。真の意味の平和はこのようなところにおいてのみ実現するのであるから、神の国の平和ということは、神の国の本質を表わす適切なパラフレーズと言えることである。神曲中の言葉で最もよく人に知られているものの一つである、「彼の意志こそわれらの平和」 *La sua volontade è nostra pace.* (Paradiso, Canto 3, l. 85) とも共通する観念である。

第5連は日毎の糧のための祈りであるが、ここでもダンテは興味深いパラフレーズを行なっている。彼はここで、日毎の糧を魂を養う霊的な食物としている。そして、この霊的な糧で養われていなかったら、人生の歩みを力強く進めて行くことが出来ないとしている。

without which he goes backward through this  
harsh wilderness who most labours to advance.

これがないならば、この荒寥たる曠野を力を尽して進むとも、ただ後方に退くことになるにすぎません。

この表現は非常に簡潔なものなので、よほど注意して読まねば、その深い意味を捉えることが出来ないだろう。この箇所は山川訳では

これなくば、この曠野を分けて進まんとて最もつとむる者も退く

となっているが、この原文に忠実な日本語訳によって、ダンテの意図するところを理解するにはかなりの沈潜と努力とが必要であろう。

この部分で注意したいもう一つのことは、ダンテが人生を “quest’ aspro

18) 「神の国は近づいた」(マルコ 1 : 15) を James Moffatt は *God’s reign is near* と訳している。

### ダンテの「主の祈」について

deserto”（荒寥たる曠野）と言っていることである。ダンテ自身、その生涯の大半を追放者としてすごし、荒野に行くような苦しい生涯を送った人であった。神曲冒頭の「暗き森」の叙述はそのことを反映するものであろう。“esta selva selvaggia e aspra e forte”（荒れ果てて苛酷で分け入りがたい森）——それは思い返しても恐ろしく、口にするだけに心が痛む経験であった。しかし、この荒野の経験は、地獄の幻想においてだけではなく、ダンテ自身の生涯における経験から出たものであったろう。この荒野経験が暗き森の思想となり、地獄観念を深めたのであろう。そうして、このような荒野の旅をあやまらず導いたのが、神より与えられた霊の糧マナであったというのである。

第6連の祈は罪の赦しのための祈りである。この祈りも主の祈とほとんど一致しているが、新しい観念として、“e non guardar lo nostro merito”（わたしたちの功績を見ることなく）が入ってきている。われらに加えられる罪を、わたしたちは赦しますから、わたしたちの犯す罪を赦して下さいと言えば、わたしたちの赦しというわざがもととなって、わたしたちの赦し与えられるようにとられるかも知れないが、そうではないことをハッキリするために、「わたしたちの功績を見給うことなく」という言葉をわざわざ付け加えているのである。イエスは主の祈りを教えたすぐあとで、

「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの父もあなたがたをゆるして下さるであろう」<sup>19)</sup>と言われているが、これは人を赦す心を持つことの大切なことを教えていられるのであって、赦すというわざが必ず赦しという恵みをかちとるということを言っておられるのではないであろう。ダンテの考えていたこともこのことで、彼が人間のわざと信仰ということを深く考えていたことが知られるのである。

ダンテの主の祈のパラフレーズで、本来の「主の祈」ともっとも相違しているのは、最後の部分である。この部分は、その内容から見て、パラフレーズと言うよりも、むしろ、註釈とでも言うべきものであるが、ダンテはこの部分を

19) マタイによる福音書第6章14節

も主の祈のテキストとして、浄罪者に称えさせているので、主の祈に含めて取り扱うことにする。これは悪魔のころみとそれからの救いを求むる祈に関して附加されたものである。地上においては、悪魔がすきをうかがって人間を誘惑しようとしているが、煉獄においては、もはやここまで悪魔の力が及ばず、誘惑の危険はない。従がって、試みにあわせず悪より救い出し給えと祈る必要はなくなっているが、なおこの祈をささげるのは、浄罪者自分たちのためではなく、地上に残して来た人々が、悪魔の誘惑になやまされていることを思い、彼らの上に神の守りと助けが与えられることを願ってなされる祈だからなのである。

ダンテは傲慢の罪の根にある自己中心的なエゴイズムを考えたのであろう。自己の事のみを考え、自己のみを高しとして他を軽しめて見下げる罪が傲慢であることを思い、この傲慢の罪を浄めるためには、他の人に心向けることが必要であることを考えたのであろう。それで主の祈にさらにもう一つの祈、すなわち他の人のための祈を附加したのであろう。

この祈に関連してダンテは語っている。

Se di là sempre ben per noi si dice,  
di qua che dire e fare a lor si puote  
da quei ch'hanno al voler buona radice?

Ben si dee loro atar lavar le note  
che portar quinci, sì che mondi e lievi  
possano uscire a le stellate rote.<sup>20)</sup>

(If good words are always being spoken for us there,  
what can be said and done for them here by those that

20) *Purgatorio*, Canto 11, ll.31-36



### ダンテの「主の祈」について

have their will rooted in good? Well may we help them  
to wash away the stains they carried hence, so that pure  
and light they may go forth to the starry wheels.) 21)

あそこ（煉獄）でわたしたちのためにより言葉が常に語られているとすれば、善に根ざしている意志を持つ人々によってここ地上で、いかなる言葉、いかなる言葉、いかなる行為が彼らのために語られ、またなされるべきだろうか。

清く、また軽やかに、かの星の天界に、彼らが行けるように、彼らが地から持って行った心の汚れを洗いおとすように、わたしたちも、彼らに助けを与えるべきであろう。

ここに末尾の祈についてのダンテの意図がうかがわれる。煉獄にある霊たちも、地上にある人間たちも、おたがいにみずからの罪を認めて、そのきよめを祈り合うということに、傲慢の罪よりの清めを与えられるというのである。傲慢の罪の根は愛の欠乏にある。愛の心に満たされるほど傲慢の罪を浄めるものはないのである。

### ダンテの強調点

以上試みてきたダンテの主の祈のパラフレーズの検討によって、ダンテが煉獄第1環道において、傲慢の罪を浄める靈魂たちは、単なる礼典的（リタージュカル）な祈禱文として、ラテン語の主の祈を口に称えるのではなく、当時のイタリア人が誰でも理解できる俗語であるイタリア語に訳された主の祈を中心として、さらに主の祈の大切な点を明らかにするためのパラフレーズを加えて、深く神のみ旨を理解し、これを学ぶものとして、彼らに称えさせているのである。

21) Ibid. Translated by John D. Sinclair.

ダンテがそのパラフレーズによって特に明らかにしようとしているものを列挙すれば次の諸点であろう。

1. 神の愛と力との強調である。そのみ手によって、天も地もそこに満ちているものすべてを創造し、これを支配し、愛を以って護り給う神のすがたがうき彫りにされている。

2. このような神の大きな力と愛とを思うときに、人間の存在は実に微少なものとなる。人間はただ神のささえによってのみ生を保ち得るのである。

3. 人間はそれ自身無力であって、容易に悪の誘惑に負けて罪を犯すものである。そしてその罪からのがれ出る力を彼自身持っていない。

4. 罪の生活にあっては、力をつくして励む善行もおのれの救いには役立たず、努力すれば努力するほど救いから遠ざかるだけである。

5. こんな荒野のような罪の生活から人間を救い出し得るのはただ神の恵みのみ手のみである。

6. 人間の世界を、神のみ旨の行なわれる平和に充ちたところとするのも、ただ人間の努力のわざだけでは不可能で、恩寵として神から与えられるのでなければ、神の国は実現しないのである。

7. このような人間の無力と神の恩寵とを思うときに、いかなる傲慢の人もその心は碎かれて謙虚とならざるを得ない。

8. そして、自分のことのみ心に向けて閉されていた心も開かれ、他の人のことを思い、その人々のために神の恵みを祈るようになる。

主の祈のパラフレーズにおいて表わそうとしている、ダンテの主の祈の強調点を読み取るときに、ダンテが如何なる意図を以って、煉獄第11歌の冒頭において、傲慢罪を浄めている靈魂たちにこの主の祈を称えさせたかが諒解されて来ると思う。ダンテは決して、当時、教会の礼拝において用いられていた所の一つであったからと言ったような形式的なことだけを考えて、主の祈をここに配置したのではなかった。主の祈が持っている高い神の観念や、深い人間理解

### ダンテの「主の祈」について

や福音信仰を正しく把握して、この祈こそ傲慢罪を浄めるに最も有効なものであることを信じて、これを使用したのである。ダンテは真実な態度で主の祈を称えるならば、人間の持つ傲慢さが打ち砕かれ、神の前に謙虚な魂とせられることを信じていたのである。こうしたダンテの主の祈理解を思うときに、彼が煉獄第1環道に配置する祈として主の祈を選んだことは最も適切な選びであったと言わねばならない。重荷に身をかがめ泣きながら傲慢の罪を浄めている靈魂の称える祈として主の祈を用いたことははなはだ適切な処置であったと思うのである。ダンテは主の祈を祈ることが、傲慢な心を打ち砕き、人の心を謙虚なものにする力があることを確く信じていたのである。

主の祈は教会においてしばしば用いられ、キリスト者の生活において繰返し称えられているが、その主の祈はどれほどの深い理解を以って称えられているであろうか。主の祈を称えることによって傲慢さが打ち砕かれ、謙虚にされたとの経験をもつものがどれほどあることだろうか。ダンテの主の祈のパラフレーズは、主の祈を用いるすべてのキリスト者に正しい主の祈の称え方を明らかに、また力強く教えていると言えるであろう。